

終章 職業への移行が困難な若者の背景を考える

1. はじめに

第1章から第5章まで、職業への移行が困難な若者の実態とその背景にあるものを、51のケース記録をもとにそれぞれ異なる角度から考えてきた。序章に記したとおり本調査は未だ続行中であり、この報告書は中間段階での暫定的なとりまとめではあるが、最後にここまでの分析を整理しておきたい。

調査のねらいは、学校から職業への移行が困難な若者（＝無業・失業・フリーター）の中でも、積極的に就職先探しをするようなタイプでなく、これまでの就業支援施策をうまく使っていない「意欲」の低い若者たちの実態を把握し、その行動の背景となっている要因を分析することであった。そもそもこの調査は、移行がスムーズに行われている若者との比較を織り込んだ調査ではないため、各章でとりあげたそれぞれのケースが抱える学校や家庭などの問題が、移行を困難にする決定的要因であるか否かという因果を測ることはできない。たとえば、ケースうち幾人かは厳しい家計のもとにあり、進学をあきらめ、あるいは、高校在学中からアルバイトが生活の中心を占め、なかにはそこから家計に貢献することを求められていた。しかし、こうした状況にある若者のすべてが、職業への移行に失敗しているわけではない。そうした意味で、ここで整理した移行の困難度の高い若者の背景にある事情は、あくまでも要因のひとつとなっていることが推測されるだけである。しかし、その事情を掘り起こし議論の俎上に乗せること、さらに、掘り起こした事情の相互の関連を整理してパターン分けができれば、彼らについての理解を進め、その因果の連鎖を解くための政策の立案に貢献しうるのではないか。

そうした視点から、この章はこれまでの各章で明らかにされた事情の相互の関連を整理し、移行の困難度の高い若者を理解するために、彼らの事情のパターン分けを試みることにする。

2. 移行困難な若者の事情の整理

第1章から第5章までの各章では、ごく簡単には、次のような移行困難な若者の事情が抽出された。

第1章では、学校から職業への移行プロセスのどの段階でどのような障壁があつて、正社員での就業から離れていくのかをとりあげた。若者たちは、高校非進学、学校中退、卒業時に就職活動をしなない、就職できない、早期離職、離職・離学後のアルバイト選択など、いくつかの段階で、正社員就業への経路から離れていった。この正社員就業の経路からの離脱の段階ごとに本人の進路選択理由や背景に意識されていたもの、離脱の後の就業状況等を見ていった。ここから、中等教育で中退した者や卒業の見込みが立たなかった者では基本的なレベルの就労準備ができていないという問題があること、地方の高卒者では就労準備が来ている者でも求人が決定的に少ないため就職できないでいること、また、高等教育進学者では

進路選択の失敗や不適応から中途退学していたり、自由応募の市場で応募先選択の基本的な方向付けに迷っていたために、一斉に進む新卒就職のプロセスに乗りそこになっていたこと、進学浪人や留年期間が長くなった者では、新卒就職のプロセスに乗ることそのものをあきらめる傾向があることなどが明らかになった。

これを就労のディメンジョンにおける移行の阻害要因という見方で整理すると、①労働需要の質が変化し高校生への求人は大幅に減っている。②それは特に地方で著しく、成績も出席状況も良好な高校生が就職できないでいる。一方で、③新規学卒採用が基本であるという採用姿勢は変わらず、新規学卒時をはずしてしまった無技能の若者の正社員就職は難しい。④非典型雇用での需要が拡大して正社員の口はなくともアルバイトの口はある。⑤非典型雇用からの正社員登用は、限定的である。⑥過年度卒業や留年等での年齢オーバーは新卒採用でハンディになる。いったん就職した者では、⑦少ない新入社員に過重な負荷がかかっている。⑧職場に仲間集団が形成されない、などの要因が挙げられる。図終-1の左上には、これらの要因を就労のディメンジョンから見える阻害要因として配した。

職業へのスムーズな移行を支援してきたのはまず学校である。学校の次元では、まず第2章でそれが持っていた包括的移行支援機関としての役割に注目した。移行がうまく進んでいないということはそうした支援が有効に機能していないということであるが、移行に困難をかかえる若者たちのなかでも、高校選択に真剣に取り組んだ者は高校を離れるときの進路選択にも真剣に取り組む姿勢があり、さらに、こうしたケースでは移行の危機にある現状においても将来への希望や展望を持っている傾向がみいだされた。大学進学時の選択姿勢とその後の就職活動、将来展望の間にも同様な関係がみられ、「就職」という形に結びつかなくとも、進路選択にまじめに取り組む姿勢は移行の危機が重大なものになるのを防ぐという意味で、有効であることが指摘される。学校の移行支援機関としての役割は改めて評価されなければならない。

他方、進路選択という課題に真剣に向きあっていないケースも多い。第3章はむしろこうしたケースを中心に高校が果たす役割を検討した。ここで明らかになったのは、学校に行く理由もないがやめる理由もない、友達と過ごすことで時間をつぶすという消極的な「居場所」としての学校であった。かつて学校が持っていた社会化機能はすでに大きく低下している。そこで、アルバイトなどの就労場所や公共職業訓練機関などの学校以外の機関での訓練や体験によって学校の機能を補完する必要が指摘される。

第2章と第3章からは、学校というディメンジョンにおける移行阻害要因が抽出される。これは高等学校段階と高等教育段階で大きく異なる。高校段階では、①受験する高校を選択する段階からの進路選択に真剣に関与させる進路指導・キャリア教育が十分展開されていないことがある。②とりわけ、入学難易度の低い高校では、進路選択の関与ばかりでなく、学校を消極的な居場所としか意識していない高校生が少なからずいて、基本的な社会化もすすんでいないし、学業達成の意欲も形成されていないという問題がある。基本的なエンプロイ

アビリティが未形成の若者たちを生んでいる。高等教育では、③やはり、大学進学段階での進路選択に問題があり、中途退学などにつながっている。また、卒業をひかえての就職活動にわずかに参加しただけで降りてしまう早期就職活動断念者の問題がある。こうした進路選択の課題を乗り越える支援となるキャリア教育が、今、大学段階でも必要になっている。ところが、こうした支援を提供している大学の支援機関は意欲の強い者にしか利用されていない。④学生たちが就職活動の途上で立ちすくんでしまうのは、キャリアの方向付けが出来ずにいるからに他ならない。大学教育の専門性が一定のキャリアの方向との関連(レリバンズ)を有していれば、職業選択の課題への立ち向かい方も異なろう。我が国の大卒者の場合、技術系職種での採用は工学教育等と結びついていることが多いが、事務・営業系職種では専攻を問わない採用が多く、大学教育の内容と就業先とは非常に緩やかな関連性しかないケースが多かったと言える。そうした結びつきのあり方にも変化が生じてきていると思われるが、改めて、そのレリバンズについて吟味すべき段階だと思われる。

さて、高等教育進学者と高卒以下の学歴の者では移行の実態が大きく異なるが、高等教育への進学を規定するのはまず親の家計であり、また、家族・階層は就労への意識や態度を規定する大きな要因である。第4章では家族の影響を分析した。都市部の高卒以下の学歴者では、フリーターでも収入の一部を親に渡していた。親はお金さえ入れれば就業形態は何でも良いとみており、子供に対する態度は無関心と放任で、子どもは特にやりたいことはないがそのことを悩んでもいない。これに対して高等教育卒業者では親は子どもの進路に関心が高く、教育成果に強い期待を持っていた。このプレッシャーに耐えられずに挫折するのがこの層のひとつの典型である。また、「やりたいこと重視」の子育てが、結果として、子供の全能感を高め夢と現実のギャップを拡大してなかなか仕事に就く決心のできない若者を生み出す面もあった。さらに地方では、地域経済の衰退が家計を直撃し、就職できない場合に進学を選択することもできない状況があった。若者は職歴、経験を積むべき年代に、社会的文化的に貧困な環境に閉じ込められる危機に瀕していた。

家族という次元での移行の阻害要因としてとらえなおすと、まず、①都市部の家計状態が厳しい家庭が挙げられる。そこにしばしば見られる子どもへの低い関心、低い期待水準が子どもたちに与える影響は大きいだろう。高校入学と同時にアルバイトをすることが支持され、子どもたちは親から小遣いをもらう段階を終了して、自分のアルバイト収入でまかなう者が少なくない。ひとたびアルバイトが始まると、親からの経済的自立の一步が始まり、後戻りすることはなくなる。自立への開始が早い、不安定な雇用、少ない収入などに規定されて、親からの完全な自立を達成するのは困難になっている。欧米諸国で指摘されている、もっとも社会的排除に陥りやすい典型に近い。これにたいして、②高学歴家庭では、違う形での阻害要因が生じていた。教育に関心の強い高学歴家庭の子どもたちは、ひとたび学校で失敗すると、職業選択の過程にも負の影響がみられがちであった。また、しばしば「やりたいこと」をさせてやりたいという親の想いやパラサイトを許す家計状況が、仕事選びの段階で立ちす

くむ若者たちを生み出す要因にもなっていると思われる。他方、③地方の高卒者の場合は、就業機会が非常に限定されている中で、仕事は中途半端であり、家庭と地域の限定された生活空間で暮っていた。大都市ほど小遣いを稼ぐ機会がないため自由になるお金も少ない。このことも行動範囲を制約することになっている。若者たちは、社会的文化的に貧弱な環境に閉じ込められた状態に置かれていた。

最後の第5章では、友人関係や周囲の大人や支援組織など社会的なネットワークと移行との関係を取りあげた。ソーシャル・ネットワークは若者に具体的なサポートを提供すると同時に、判断や決定を行う際の準拠枠を提供する。学校を離れてどこにも所属しない状態になると、このソーシャル・ネットワークは縮小する。この縮小化は、社会的発達を減少させ、自信を失わせたり現在の状況に対するやる気を失わせ、不活性化に結びつく。これは求職活動をさらに困難にする要素となる。他方、早く学校を離れる層では、閉じたソーシャル・ネットワークの中で求職活動と短期就労を繰り返す傾向があった。こうした層では、早い段階で学校からの離脱ではないもう一つの選択ができる準拠枠を提示することが必要である。

社会という次元での移行阻害要因としては、ソーシャル・ネットワークの視点から、①それが小さい仲間集団で閉じて、発展性を失っている状態、また、②縮小していき孤立化していく状態にあることが挙げられる。こうした状態におちいるのは、これまで我が国では職場に(正社員として)所属することが、安定し、また発展していくソーシャル・ネットワークを得る重要な契機であったことと関連が強い。「就職」によって得られる新たなソーシャル・ネットワークが個人のなかで大きな役割を果し、学校時代のネットワークは弱まっていくし、また、いったん職場を離ればこのネットワークは消えていく。正社員になっていないことから、こうした職場を契機としたネットワークが得られない。また、地域社会におけるソーシャル・ネットワークは、沖縄県に残る「ユイマール」のような形で若者を地域社会の一員として取り込む役割を果してきたと考えられるが、地域社会の変化とともに多くの地域で弱体化している。こうした職場や地域のネットワークが弱い中で、学校時代からの仲間集団のネットワークのなかで小さく固まったり、また、それから離れることで孤立化していく状況を生んでいる。

また、社会と言う次元では、ジェンターの要因もあり、女性のなかに「専業主婦」志向を理由に職業的自立への道を放棄する傾向があったりすることが挙げられる。

3. 移行が困難な若者の状況のパターン化

各ディメンジョンごとに移行を阻害する要因を整理してみたが、この要因を組み合わせ、移行が困難な若者の状況についてパターン化を試みる。

表終-1 は暫定的なものであるが、現段階での移行困難な状況を大きく5つに分けてみたものである。それぞれの状況ごとにどのような各ディメンジョンの背景要因があるかを整理

した。

まず、最下段の「機会を待つ」タイプは、労働力需要が著しく落ち込んでいる地域状況が生んだ移行困難者だといえる。この調査では地方の高卒者たちに多い。フリーターを3類型(やむを得ず型、モラトリアム型、夢追い型)に分ける議論に副えば、〈やむを得ず型〉に当たるもので、景気回復がみられ地域経済の改善がすすめば、解消される可能性が高い。

このほかの類型は、先の3類型で言えば、ほとんど〈モラトリアム型〉にあたるものだろう。学校を離れる時点で、先の見通しを持たない、選択の先送りをしているというのが、〈モラトリアム型〉の特徴であるが、ここには多様な若者たちが含まれており、移行支援の対応策を考えるうえでは、さらにその実態を整理する必要がある。

「刹那を生きる」タイプは、都市の高卒者で多く見られた。表に示すように、学校を消極的な居場所とし、学業不振や遅刻・欠席の多い学校生活をしてきた。家庭背景も厳しいものを持ち、欧米社会で言われてきた社会的排除層と共通の側面をもつ。こうした層では、欧米での若年失業問題と同じように、景気回復により求人が増えたとしても、就業への移行に困難を抱え続けることが考えられる。

我が国の特徴としては、高等教育卒業者で多くみられた「立ちすくむ」若者の問題が大きいのではないと思われる。わが国の産業界の要請する職業能力と大学の専門教育の関係はこれまで、非常に緩やかなものだっただけに、大卒者のキャリアが多様化し選択の幅が広がる中で大きくなった問題だと思われる。キャリア教育の側面を強めると共に、職業能力と教育との関係を改めて捉えなおしていくことが必要になっている。

「つながりを失う」タイプは就業以前の社会関係の構築から支援を要する。支援の体系化が必要なタイプだろう。

「自信を失う」タイプは、心身ともに疲れた状態であった。時間の経過と共に、意欲も高まる傾向があり、当初は短時間の就業を望んだりしているが、徐々にフルタイムの就業への意欲も回復してくると考えられる。

4. 有効な支援策を考える

以上の検討から、若者就業支援策として、次のような対策が有効ではないかと考えられる。

第1に、地域主導のワンストップ、またはネットワーク型のシステムにより、多様なニーズに合わせた幅広い就業支援サービスを体系的に提供できる体制を作ることである。

安定的な雇用を得て、継続的に就業することは、若者が大人になり社会の一人前の社会の構成員になる過程の一つである。大人になるための他の課題(親の家計からの独立や自分の家庭をもつこと、納税や社会保険への加入、社会参加、政治参加など)と密接に絡んでいる。特に移行が困難な若者の場合は、学校を中途退学していたり、引きこもりの経験をもっていたり、所属集団がないことから孤立し不安を抱えている場合もある。「つながりを失った」タイプでは、就業の前段階で学校への復学や社会参加をサポートすることからはじめることが

必要な場合もある。時には、医療機関との連携が必要なこともあろう。

これらの問題から就業の問題だけを取り出して対応することは有効ではないし、また、サービスを利用する側にとってみればひとつながりの問題である。社会知識も経験も少ない若者にとって、サービス機関を使い分けることは難しく、また、わかりにくい。利用する側のニーズに立てば、ひとつの組織で広く対応できるか、あるいは、連携して問題解決にあたる対応が必要である。

これは同時に、幅広い対象へのサービスの提供ということでもある。すなわち、特に就業への移行が困難な者に対象を絞ると、対象者にとってはスティグマに感じられるかもしれない。多様な層に多様なサービスを一つながりで提供することの効果はこの面でも期待できる。

また、労働と教育、家庭、社会にかかわる問題を解くには、その連携をとりやすい地域行政が主導的役割を果たすことが望ましい。

そこで若者に対して提供するサービスとしては、就職斡旋や教育訓練機会への接続、さらに、キャリア形成をサポートするガイダンス・カウンセリング、情報提供や就業体験等の機会の提供が考えられるが、このほか、ソーシャル・ネットワークを拡大する契機を提供するために、職業・労働の範囲を超えた文化活動などの経験と交流の機会を提供するプログラムや、雇用機会の限定された地域では、雇用に代わるオルタナティブとしての社会参加のプログラムも考えられる。その際には、若者のイニシアティブを重視する施策が有効だろう。

第2に、学校教育の充実と同時に学校以外の社会化装置による補完的支援の提供である。

本調査から、初期の学校への適応の失敗（不登校、逸脱、中途退学）が、あとあとまで個人のキャリア展開の障壁となっていることが明らかになった。また、学校の社会化機能は低下し、他方、早く学校から離脱する層では、家庭環境の面でも、親自体も不安定就労で、お金さえ入れれば子供の就労形態や仕事内容に関心はなく、子供への態度は無関心と放任という、子どもに職業への準備をさせる条件を備えていないことも少なくなかった。こうした「刹那を生きる」タイプの家庭環境は欧米諸国で指摘されている最も社会的排除に陥りやすい典型と一致するところがある。その家庭の機能を補完し、同時に、低下した学校の機能をどう回復するかは、難しく、また、大きな課題である。

学校の機能の強化は、現在進められている日本版デュアルシステムのような産業界との連携の下で、職業訓練の要素を強めることで図られる部分があると考えられる。学校的価値になじまない生徒もアルバイトに熱心なのは、お金がほしいという動機だけでなく、産業界の教育力の賜物という面もあろう。学校教育に産業界の教育力を取り入れる様々な工夫が期待される。

また、学校以外の組織が、学校生活への適応をサポートしたり、ソーシャル・ネットワークを広げる機会を提供して、逸脱を引き止め、職業準備をすすめる援助したりすることは、有効だろう。その際、アウトリーチ的なアプローチを取り入れることが有効性を増すための課題となるだろう。

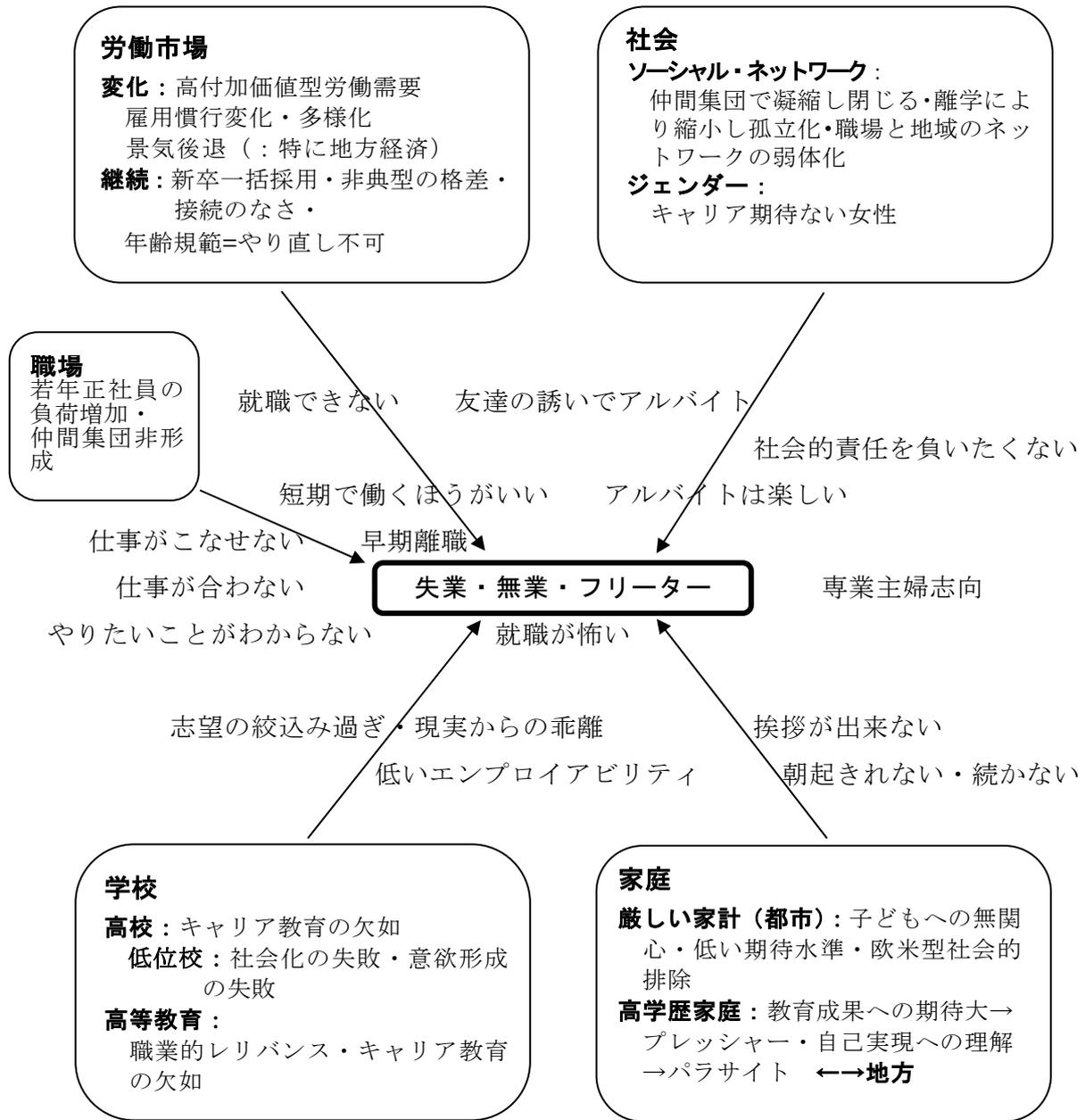
第3には、高等教育におけるキャリア教育と職業的な専門教育の展開である。高等教育で中途退学や低調な就職活動の結果の無業・フリーターになる若者は多い。この背景に、中等教育段階でのキャリア教育が不十分であることもあるが、高等教育機関自体としての問題もあろう。「立ちすくむ」タイプの高等教育卒業生への対応のためには、高等教育と職業の関係のあり方(レリバンス)を改めて検討する必要があるし、キャリア形成支援(インターンシップなどのキャリア教育のほか、転科・転部・転学等のキャリア形成のための進路変更の支援を含む)のための体制を整備することも重要だろう。

最後に、本報告書は、調査としてもいまだ中途段階での取りまとめであり、対象サンプルの構成についても偏りがあることは否めない。今後、地方部を中心にサンプル増やして考察を深める必要があるだろう。また、日本の本格的な若年者就業支援策が動き出す前夜での調査であるため、今後の施策展開をフォローしつつ、若者の実態と実施段階に移された施策との対応を考えていく必要があるのではないかと思われる。

引用・参考文献

- 小杉礼子・堀有喜衣(2003)『学校から職業への移行を支援する諸機関へのヒアリング調査結果—日本におけるNEET問題の所在と対応—』JIL ディスカッションペーパー
- 日本労働研究機構編(2000)『フリーターの意識と実態—97人へのヒアリング調査結果より』調査研究報告書 No.136 日本労働研究機構
- (2003)『諸外国の若者就業支援政策の展開—イギリスとスウェーデンを中心に』資料シリーズ No.131 日本労働研究機構
- 労働政策研究・研修機構(2004)『諸外国の若者就業支援政策の展開—ドイツとアメリカを中心に』労働政策研究報告書 No.1 労働政策研究・研修機構

図終-1 若者就業問題の構造



表終－1 移行が困難な若者たち状況のパターン化(暫定)

困難状況のキーワード	労働市場	学校	家庭	社会等
刹那を生きる	高校への求人が少ない／友達との誘いでアルバイト・アルバイトはお金のため／労働力需要に対して低いエンプロイアビリティ	学校は消極的な居場所／高校中退／遅刻欠席・学業不振／学校の就職斡旋に乗れない	厳しい家計状況／親の子どもへの関心が低い／朝起きれない、基本的な生活習慣の未確立	地域の友達との関係が密だが閉じている。他の地域にはでていけない／やりたいことは特にない／友達もみな同じような進路／遊ぶ金のためにアルバイト
つながりを失う	学卒就職のプロセスに乗れない／正社員就業の経験がなく履歴書が書きにくい／就労への希望はあるが、社会的関係の構築に課題	友人関係など、人間関係の形成に失敗／学校の就職斡旋に乗れない	親の転勤が多い家庭であったケースも	学校契機の友人関係は殆どない／就職後に何らかのトラブルで離職して、そのまま社会との関係が縮小してしまうケースも／人と話さない生活がさらに対人能力を低下させ就職できない悪循環も
立ちすくむ	大卒時点で就職活動はするものの、キャリアの方向付けができず限定的な活動／志望の絞り込みすぎ	キャリア志向なく高等教育に進学／専門教育の職業的レリバンスなし／大学の就職支援活用も限定的	大学が当然という家計／親は教育達成に関心が強い／自己実現志向にも理解を持つことが多い	皆がするから就職活動というのでなく、自分の課題として取り組んだ。／親には申し訳ないという気持ち強い
自信を失う	就職するが要求される水準の仕事がこなせず早期離職／迷惑をかけないために短期のアルバイト／2浪2留などで年齢が高いため就職をあきらめるケースも	専門教育の職業的レリバンスなし／大学の就職支援を活用	大学が当然という家計／親は教育達成に関心が強い	心身ともに疲れた状態、次の仕事はゆっくり探したい
機会を待つ	高校への求人が少ない／地域経済の衰退		就職のため親元を離れることは希望しない	地元志向が強い

参考：対象者の概要

ID	年齢(歳)	学歴	性別	地域	現状	経歴
1am	24	中卒	男	関西	アルバイト	中学卒業後、ガソリンスタンドの正社員になる。半年で辞めアルバイトを転々とする。卒業後バンド活動を続け21歳で音楽の専門学校に通う。現在はアルバイト。現実的に音楽は趣味でやりカフェを開きたい。30歳くらいまでに正社員になればいい。
2am	22	中卒	男	首都圏	アルバイト	中学校のとき不登校になり中3から高校卒業の歳まで3年半フリースクールに通う。そのときからアルバイトをいろいろしており、現在に至る。自分の能力に自信がなく就職活動に踏み切れないでいる。
3bm	17	高校中退	男	関西	アルバイト	高校を1年で中退し、アルバイト。現在のアルバイトは正社員になると拘束時間が長くなるのでアルバイトでいることを希望している。
4bf	20	高校中退	女	関西	パート	友達との喧嘩が原因で高校を中退し、現在は小学校低学年の面倒を見るパートをしている。シングルマザー。正規職員になりたいと考えている。
5bm	20	定時制 高中退	男	首都圏	NPO 非常勤	高校を中退し音楽をやるために上京。現在は音楽活動を辞めNPO活動に参加。人間関係が広く出会った人に仕事を紹介してもらおう。将来的に大学へ行くことも考え大検は受験。就職活動はしたことがない。
6bf	20	定時制 高中退	女	関西	無業	定時制高校を中退。高校在学中から短期のアルバイトを転々とする。働いてよかったという経験がない。現在はバイトを探しつつ、頻繁に遊んでいる。
7cm	24	中退後 定時制 高卒	男	首都圏	アルバ イト	中学までは勉強に打ち込んだが私立高校受験ごろから息切れし定時制高校へ編入。卒業後アルバイト。在日朝鮮人というマイノリティーとしての感覚を仕事に活かしたいと考えている。
8dm	24	大学中退	男	首都圏	無業	授業についていけず大学を2年半で中退し、編集の専門学校へ。現在は時々日払いのアルバイトをしている。編集の仕事に就職を希望。
9dm	22	短大中退	男	首都圏	無業	自衛隊に入隊するため短大を中退するがすぐに辞め、アルバイトを転々とする。その傍ら俳優をめざし事務所にも所属している。現在は華道家をめざしているが他の職の訓練もしようと考えている。
10df	28	大学中退	女	首都圏	無業	大学に足が遠のき1年の前期で中退。その後アルバイトをしつつ劇団や英語教室にも参加。現在は趣味やボランティア活動をしている。
11dm	32	大学中退	男	首都圏	アルバ イト	大学生のときに家にこもるようになり2回留年して大学を中退。その後アルバイトを転々とするが人付き合いが苦手なため長くは続かない。現在、放送大学に在籍し、引きこもりの自助会にも1年程度参加している。
12df	20	専門中退	女	関西	無業	看護の専門学校中退後、現在は短大の通信課程の保育の結果待ち。専門学校のと時からアルバイトをしている。
13dm	28	大学中退	男	首都圏	アルバ イト	専門学校、短大を経て大学を病気で中退。アルバイトを転々をし、その後就職支援のセンターへも出向いている。現在はアルバイトをしつつ体の調子を整えている。将来的に正社員になることを希望。
14cm	19	高卒	男	東北	無業	卒業後5月に父親の紹介で就職するが12月に辞める。現在は午前職安へ行き午後は遊ぶ生活を送る。月に1度程度のアルバイトをしている。就きたい職業はないが正社員になることを希望。一人暮らしをしたいと考えている。
15cf	18	高卒	女	関西	アルバ イト	高卒後、車を買うためにアルバイトを3つ掛け持ったこともある。現在は一人暮らしと美容師の専門学校に行くための費用をアルバイトをして稼いでいる。

16cf	24	高卒	女	首都圏	アルバイト	高卒後、アルバイトを5年間転々とする。2年前から正社員になることを希望しているが、やりたいことが分からず就職活動は雑誌やインターネットで調べる程度。現在は事務のアルバイトで居心地がよい。
17cm	19	定時制高卒	男	関西	アルバイト	定時制高校を卒業後アルバイト。正社員は退職まで働き続けるというイメージがあり、やりたいことがなければあまり考えられない。
18cf	20	高卒	女	関西	アルバイト	高校には希望していた服の販売の求人がないと聞き学校から就職する気は全くなかった。卒業後2年ほどで結婚し専業主婦になると考え、卒業後はアルバイトを転々とする。
19cf	18	高卒	女	東北	アルバイト	高校時代は就職活動はせず、コンビニでアルバイトをしていたがシフトを減らされたので辞めようと考えている。現在は免許をとりに行っている。販売の仕事をしたい。将来は専業主婦を希望。
20cf	18	高卒	女	関西	アルバイト	高卒後、大学進学を希望し自分でお金をためるために、学校の支援制度を利用して高校でアルバイトをしている。
21cm	31	高卒	男	首都圏	無業	高卒後アルバイトを転々とする。途中、病気やけがを経て、現在は就職支援のためのセミナーを受講している。
22cf	19	高卒	女	関西	無業	高卒後専門学校の試験に落ち予備校にも通うが、アルバイトが忙しくなり予備校を辞める。現在は怪我のため無職。祭りが好きなので祭り関係の仕事にも就きたい。
23cm	21	高卒	男	関西	アルバイト	高卒後、学校の支援制度を利用して高校でアルバイトをしながら1年間公務員試験をめざす。その後、販売・接客のアルバイトに就く。アパレル系の販売の仕事で正社員になることを希望し就職活動中。
24cf	19	高卒	女	東北	無業	現在はハローワークでアルバイトを含め仕事を探している。20歳くらいまでに正社員で医療事務に就くことを希望。
25cf	18	高卒	女	東北	アルバイト	高卒後ハローワークへも行ったが広告で見つけたホテルの宴会サービスでアルバイトをしている。正社員で事務かサービス業に就くことを希望。家を出て一人暮らしをしてみたいとも考えている。
26cf	20	高卒	女	東北	アルバイト	高卒後にインターンシップを経験し、そこで紹介してもらった店で現在はアルバイトで事務をしている。将来は事務系の仕事で安定したいと考えている。
27cf	18	高卒	女	東北	無業	高校時代飲食関係の正社員の仕事を希望するが決まらず。卒業後パン屋でアルバイトするが体調の悪化で6月には辞める。現在は求人誌を見てアルバイトを探している。
28cf	19	高卒	女	関西	無業	専門学校進学を希望するが親に反対され、高校卒業後は高校生時代からの接客と賄い作りのアルバイトを継続。現在は親の看病のため仕事をしていない。将来は接客か料理関係の仕事を希望。
29ef	24	短大卒	女	関西	アルバイト	短大卒業後、就職先が決まっておらず半年間は何もせず。その後アルバイト。正社員になるのはもはや無理だと感じている。本当は何かやりたいかのかよく分からない。
30ef	24	専門卒	女	首都圏	アルバイト	専門学校在学中は卒業制作と怪我のためほとんど就職活動ができず、卒業後はアルバイト。2年後親の病気の看病で1年間仕事を辞める。現在はアルバイト。映像・音響関係の職を希望し就職活動中。

31ef	24	短大卒	女	首都圏	無業	短大在学中就職活動を少しするが決まらず事務職のアルバイトを続ける。現在は求職中で就職支援のセンターなどに出向いている。保険などがあれば正社員でなくても構わないと考えている。
32em	28	大卒	男	首都圏	アルバイト	大学を6年で卒業後、いったん地方の実家に戻り社労士の資格をとる。現在は首都圏に戻りアルバイトをしながら就職活動をしている。職業能力開発総合大学校かロースクールに入ろうと考えている。
33em	27	大卒	男	首都圏	アルバイト	大学在学中は就職が決まらず、卒業後公務員試験をめざす。1年後に就職するが4ヶ月で辞職。現在は公務員を目指しつつ、小売業でアルバイトをし、そこで正社員になることも考えている。
34ef	24	大卒	女	首都圏	アルバイト	出版社をめざし就職活動をするが決まらず、大卒後アルバイトをしている。現在は簿記1級の試験の結果を待ち。しかし本当にやりたい仕事は何かということを悩んでいる。
35em	25	大卒	男	首都圏	アルバイト	大卒後1年間海外にワーキング研修に行く。現在はアルバイトをし、じっくり考えてやりがいのある仕事に就職したいと考えている。
36em	25	大卒	男	首都圏	無業	在学中就職活動を少しするが、すぐに就職する気になれず卒業後もアルバイトを続ける。現在はハローワークに通いコンピュータ関係の職をめざし就職活動を始めている。
37cm	19	高卒	男	関西	アルバイト	高校の案内で就職が決まるが入社式の日程を知らずに行かず、そのまま辞職。高卒後はアルバイトをし、正社員になるつもりはない。バンドで生活できるようになりたいと考えている。
38cf	18	高卒	女	関西	無業	高校在学中は就職が決まらず、卒業後にハローワークで見つけた職の正社員となるが体調を崩し4日で辞める。現在はチラシなどを見て職を探している。正社員なることにこだわっていない。
39cf	19	高卒	女	関西	無業	高卒後、学校の紹介で事務の正社員となるが事務仕事が好きでなかったため辞める。現在は仕事を探しているが、正社員になりたいという希望はない。
40cm	19	高卒	男	関西	アルバイト	高卒後学校の紹介の料理屋に就職するが2ヶ月で辞める。現在は調理関係のアルバイト。まだ遊びたいので就職をためらっている。調理師免許をとるつもりでいる。
41cm	22	高卒	男	関西	アルバイト	高卒後学校の紹介で調理師見習いになるが一生の仕事かどうかを悩み1年半で辞める。その後はアルバイトを転々とする。現在はアルバイト。
42cm	24	高卒	男	首都圏	無業	高卒後、土木の見習いとなるが5ヶ月で辞める。その後はアルバイトをしている。現在は何をやろうか悩みつつ仕事を探している。
43cm	20	高卒	男	東北	無業	高卒後学校の紹介で運送業に正社員として就職するが、きつかったので1月に退職。その後はたまにハローワークへ行くが貯金もあり本気で探してはいない。1年以内に再就職を考えている。
44ef	27	大卒	女	首都圏	アルバイト	大学生のときに海外でボランティアを経験する。その影響で卒業後カウンセラーの勉強をし、初級の資格を取る。同時に卒業後はアルバイトを続け、現在就職活動中。

45cm	24	高卒	男	関西	アルバイト	建築関係の専門学校に進学を希望するが経済的理由により諦め、高卒後正社員となるが大卒との給料の差に納得がいかず3年で辞める。現在はアルバイト。正社員をめざし就職活動中。
46cf	19	高卒	女	関西	アルバイト	高卒後、学校の紹介で美容院に就職し、同時に美容の職業訓練校に行く。1年後に美容院を辞め、現在は訓練校に通いつつアルバイトをしている。
47em	26	大卒	男	首都圏	無業	卒業後アパレルに就職するが1年半で辞職。半年後から時々アルバイトをしながら大学の就職課も利用しハローワークへも通って就職活動をしている。正社員をめざしている。
48em	24	大卒	男	首都圏	職業訓練	大学卒業後いったん就職するが仕事が合わず9月に辞める。現在は造園のアルバイトをしている。造園での就職を考えているが需要がないのでほかの職も考えつつある。
49em	26	大卒	男	首都圏	無業	大学卒業後、レンタル会社に就職するが、「アルバイトを使えない」など評価されずに、2年8ヶ月で辞める。現在は、福祉施設で週1回ボランティア。やりがいのある仕事をゆっくり探したい。
50em	25	専門卒	男	首都圏	無業	専門学校を卒業後、就職するが5ヶ月で辞める。その後、ホームヘルパーの資格をとるが、親の看病に徹し、現在も家事従事。来年度から幼稚園教諭の資格をとる学校へ行くことになっている。
51em	22	専門卒	男	関西	アルバイト	専門学校卒業後就職するがバンドを本格的にやりたいという理由で3ヶ月で辞める。現在はアルバイトだが健康保険、厚生年金、雇用保険がある。しかしバンドで成功することを希望し優先している。

労働政策研究報告書 No.6

移行の危機にある若者の実像

－無業・フリーターの若者へのインタビュー調査（中間報告）－

発行年月日 2004年5月31日

発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

URL <http://www.jil.go.jp/>

編集 研究調整部 研究調整課 TEL 03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

*労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。

刊行される報告書（有料）を希望する方は書店又は下記にご連絡下さい。

連絡先：独立行政法人 労働政策研究・研修機構 広報部成果普及課

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4丁目 8番23号

TEL 03-5903-6263 FAX 03-5903-6115